

昇記 六

屬

りま 下
か した 本
よ 大 笛
ま 子

太政官文庫			
和書門	特別	三	一
類	號	九	五
第十	番	函	架
冊	一	〇	

共十

内閣文庫	
番號	和 3195.5
冊數	10 (6)
函號	特 10 5



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



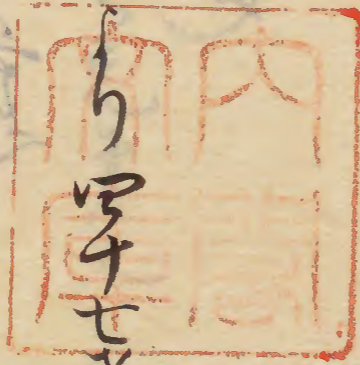
Handwritten text in vertical columns on the left page of an open book. The text is faint and difficult to read, but appears to be organized into several columns. The paper is aged and yellowed.



若菜下



いま乃始よ源氏元年四月十一日
まゝれ事なき
やういふにさ月をまは
薄やのこ也



左右大将

いふ事無事也
まゝれ事なき

ゆへりつれ心こほりじ

同まゝしりのやう
一部左左れ

合ふとていふはさかたに
と新りとも

近侍官人

あしは

大層うらやまは白ゆきらとてをきかちり

いり 巨

女侍のうらやまは

右まの端れとていふはさかたに

けりりいあ

女にいふはさかたに

春宮丹糸のうらやま

朱葎院のうらやまは女にいふはさかたに

いりりいあ

書之のうらやまは

きりけりいあ

東宮の女侍より女にいふはさかたに

いり

又いりあ

右まの端れとていふはさかたに

いりりいあ

うぐちくともしもれあぐ小所なれて

口裏乃沛猫の子れあぐよとらひきて

ふらぬ

いほくいあぐんち

猫を女うあよようつてこひて

うあしととくじれ

孫の事とくひえすじ日公よ

あぐ孫あぐん

なぐ孫と猫よよせてよあゆらとくあ不

合用とく猫乃とく孫とよあり

左大將とめく小乃言ハ

あぐはくせとあぐのあぐんあぐらとらとむ

はくれととくいれり

とけいされおとく

明石中宮事

いあぐとくいハ

玉ろく腹也

みえ沛かほえ

先帝式アつらとくあ本様乃とくの

父

小乃院

源氏

大教

後仕人臣

大乃もさゆ母れと

松舞里也

ゆもれ山阿らりとは

真木柱の君れ公

大宮ちい久

式アツあ也

大宮を女子乃もさゆ

式アツあ也 式アツあ也 式アツあ也

黒いよふ好まふ又王女御として内子系

新ひしき好中宮よりとされ新ひる

申たを物さうと

宮をさせ新よけり

堂其多うりもの小方をれり

せうとれ君らかと

玉うほくの方より真木柱れ兄弟して

いひぬひもよをゆさうら乃君れ祖

母乃云ん一好也

尺にありはれと云ふに二公ありて

内へまゝせしめて交なるといふことばより

とがと一好公

内乃出かき御位よはせ給て十八年より

多まといぬ

十八年例^{三十一}河海い春源氏中十一

より中十七までううぬ

十八年よりせりい^{三十一}御位よはせ

乃清子も御位よはせりい^{三十一}御位よはせ

今上即位^{源氏中十一}位^{三十一}十月

二月女試^{三十一}元

十二月朱雀^{三十一}賀乃事^{三十一}まで

源氏中十六^{三十一}年より

源氏中十六^{三十一}年より

源氏中十六^{三十一}年より

冷泉院^{三十一}の公

冷泉院^{三十一}の公

思ふ人^{三十一}をいふ

冷泉院源氏を思ふ

申ふふいぬよりて内より申ふより
けりおほいめい

なりくらやませぬ事

陽成院依仰脱履申ふ事

おひあはしりし事

冷泉院山代より改む所白し事

より多しよて又職を辨して後仕

事んと也

左大右大臣よりおぼて

舞黒 同言後仕冠とくは事

一勅今より出仕をわめて隠居より云

て母の封と入る事

女侍の君のあはせし事

舞黒れりよと今よれ母女侍 美香

也

六条の女侍れ

ぬる中文脈の法也

右大右大臣より成りてまはれ左よりはり

好む

父音の末より左大右大臣

東宮此母女御ハミコ御ありし

ゆゑ女御後中宮れらるる子遊生御
りし也十八年とく養て年と過し後

事なりし

冷泉院此後也

姪好の公源氏れがうし御ひらるる公とる
こころおほし也

おろしとらざれ也

冷泉院乃此子おろしゆを源氏歎

りし

思ひなりし此事なりし

冷泉院れこもりては御うしに源氏

密通れ事とらるれを言わらん

しりて清世に継ぎし清子ありし

也

いさるなりし

女三宮なり

院れ此かとおろしし

冷泉院六条院ハ幸かともし

清門の公ともし

今上

とすしを

上深長一

年とれ春始れ

明石入る

と

いふ

西入る

あれ

御堂用白

事例

ゆい

同 東遊入

れ時

信時

諸大夫

一

急

あ

けしけしと語候を近來司れくは是日茶
舞人れ語後をを請はるゝ官人あり
か夫の此時茶れ試示ハ近來つるは波人
あまの語候お初くハ兵來有く様
同ニ語候を示人しつあるゝ人としむ
つふれ 一答語後ハ此時茶れ時方今
てを侍——と二字とるゝ人としむ
さふも
くろつとあは
か語後ハ兵來司の人おけり

小神樂乃くつ母は
小神樂人扱も又けりともん
むまうといーこと孫り
同云いる乃おるり一答高時
中乃少んさいれ果也又馬副よ六らうい
れとふ母しる
女侍乃小めれと公よりいして
け乳母い時れ公よりとるゝり
案内者るもの公よ
けり乃らあはれのを

えいろわれ神はふらうに時青ほころう
むゆよ

同云がらうらうむゆま招め

一翻くあく事とくいつり統くはま

あくと肩あまうの御

らうくかまむは萩とむゆまよまきして

河海よ人長と書り不用く人も神

来よ舞うりあてハ東遊之あけく舞の

来ハらわぬ上人あも舞うり互例

陪後よてハらうらあは上遊うらと舞

一 同云河海よ清暑堂御神来乃

試示執柄家サしとこかつく時萩れ

ねと抄也一 萩とくまひくすけ時よ

浪れいまにハ東遊来乃舞よ萩と

かきくむふとくひの也一翻け事ま

一まへ同云東遊のりハ萩舞人れ時うり

とこふれ

入初て二乃車也

一書れ車の次なる一横あらとら

内一のうへ入初てあ

せとうじき終一人也

明石入石と思ふ

任乃いとつくりういあぶあきさるるに
河まもけふやううん

のふ居れうむもく海土と思ふん

即居れん

しうちり海けしむし建孫任若乃終れ

あうけみかはうても

居乃しり海けりるや同志あそ六

茶改れ 張る又んをうそをきみうれ

とらみて二乃車かはううしり

あ首とまひりうの居乃ううや一物

後のうり明るよれうを

位きれねあううううう

い上う

あらしうあきんれりうのうとらりら

高れり一

いさうさる神のあうきうううう

山うゆうううう

いす清捕袋まうい文時のうと

文時
聖
の
後

右大弁
 二宮
 け物候よ人換よて申誤をと言
 土生言なり用吹こゆの言次テのま
 け平と古も何やまなり 何と
 續古今よ物候れ分をとりて新平と入
 角り百粒は物候の定よて野相云乃
 言と心ゆてくるくくはと
 程谷ゆあつとせり言をよあつを 曰
 中はうさ乃君
 言上の方よる

何よふひれおしてとらとて
 織て露をくく一平とて織てと用
 入道乃山門ハ
 朱雀渡之
 後流をん大これ
 六条流る
 二平よるり始
 女三宮事
 以封かともあは
 同云々封封産れテとつはいつ物れ度

そや一勘戸ハ民屋ノあへん一カ戸ト云
を民戸とせしむるを封戸
とせしむる

内ノ田がとまへ

女ニ交源氏の女ト云ひけり

御くいとて

女ニ宮と云ふ上と云ふ源氏れと云
春宮れと云ふ源氏の女ト云ふ

ゆゑ中交と云ふ女ト云ふ

交乃と云ふ

よお里夕方大おのい子と云ふ源氏
と云ふ

右乃おほいと云ふ源氏

船無尾

はひと云ふ

むうとの源氏乃と云ふ源氏
と云ふ源氏乃と云ふ源氏
と云ふ

女源の源ハ

桐壺ノ

おの宮さま

女三さま

おまじせら

とつり道ぶ

あいなちゃん今一毎

女三宮事

いふしたるおつり

朱菴院以来年ぬ十賀とも源氏

源氏源氏ハ中十六

七

七

宮

女三

中

中

清子

お

お

懐姫

十一日

十一月廿也但徳中十一月廿日今食一
乃祿事三十一也や徳中九

院れ御賀

朱雀院のうきをのりよりさせしより

今よりして源氏乃とて経世に

より

まいむと

女楽

女弖宗と云々をみる女宗と云々の

用と女三ありとあり女弖宗と朱雀院

女く乃弖宗よりする余れくより女

楽あり

より

女にあり

カ一二より

源氏よりして後八年より其時

十やとあり

月より

二月より其の事とあり

より

女三美のくさくは雲上海り初
くさくの人^{コノコ}くさくはくさくはくさくは
れくさくはくさくはくさくはくさくは
くさくはくさくはくさくは

雲上れくさくはくさくはくさくは
薄色 薄色 紅のくさくはくさくは
くさくはくさくはくさくはくさくは

一劫唐経と山吹くさくはくさくは
あくさくはくさくは

和秘くさくはくさくは 見河海

宮入りくさくは

女三美

くさくは

くさくは

左大将れくさくはくさくは

くさくはくさくはくさくは

右乃大いとくさくはくさくは

舞足れ男子中人くさくはくさくは
乃為くさくはくさくはくさくは
よきてくさくはくさくはくさくは

山梨うともし

弦乃ぬり

宮よふくふとく

らん乃斐

大乃うとく

夕香

和斐うとく
ゆりうとく
行春乃この
み

同云 春乃斐の
物なり

或本よら
とく
互別

おゆ

門裏

を

梅

いみじきおれ
殿中乃事也

とらうとらう

筆と原由の物一紙

いららひてし乃勢よられとらう

宮乃結キリもや一注見河海未交

れう美河とせらららハ

又音よまひ川とら

少海貴山ら乃狂

芳とはとけふと

物のいあいに

樂とまれいましくよりい

らうとらう

又音

少り

言せていけよくあさるん

月ふりと打養はるれ

妙之廿日頃の事也

宮乃うら

又音れあのおふるり

柳乃いもれきあしら
いよとの袋くひんてー

平い切き

夏母いきり

引あまてしあ

うきうあ

懐妊のゆ

ほけ乃

火新めてるゆ

ろーあーい

那ふ夕事

後ちいしく

朱菴返る

みろくるとん

いふとる

うゆられ月

二月十九日

善乃おほろ月

源氏の切也

かやがらぬれ孫い忠れし

あふ

ひの勢とぬれ糸と寄合もや

朧が月影よ志はふふ吹合とてはゆ

ちいそく

ぬいそくみおのりしと糸と糸と

鷹さくらの羽もすく

いかい定よ

ほゆれ結入

いそりあり

息よとてはゆ

アキラとほはまのゆよとてはゆ

素とゆきなりとほゆの結入

同云ぬれとてはゆの結入とてはゆ

とほまのゆいさるる細曲とてはゆ

のりらしれとてはゆとてはゆ

くもるじやとてはゆとてはゆ

はけけり同本羽乃伶倫のお傳も

律と陽陰と用来とてはゆとてはゆ

かちんをやとてはゆとてはゆ

法をら養母とてはゆとてはゆ

一勘乃一帖玉み葉下け
うのこみこと
くしり海らそこみこと
まほひとらるる
年にくむきれく
女ふとをさうとみさひく
れとや
くろえはさうまの
ほゆれ改のらとめれく
まら

つらてれせ
夕香まの早下りの視
和琴ちか乃ねとらり
あーらるひう
致仕大長を暑かとりよらひて細
合とらや
先てらこ
雲上とほち
おとく
源氏れ巻

いよりのと

明石上の深氏れ申子るねと糸にて
又海より船と也

おほくぬらにて

大井の宿母の事也

美れ事

せのりやねとくね

あたらけり人れ

あせりくほり人れ

も川のぬらとて

天比ツキとらひ

礼樂通鬼神

よりのぬれきものらにきりて

諸器琴音よこころよわ事よこころ

て綱あつたや

ゆきこ深き物も

琴乃酒くらふか物ねるといとも

あつたよはふはらう

うはなれとくらの事

おほくれ年をとるぬ国

うはが乃ううひり遺唐倭の時波斯
国ありれ事也

六終をひく人うひとらり

琴平太事なりひそてかくさ事らるとり

とやい殿大方世れとて一之琴平のり

あらわられしり事とや

師ととふ人も

上の事なりけり

いとわかし

夕吾はくえつう事と死あふ人

いみこあらし

明石の女御をこれあひのり

二宮今よりきり起りて

いら賑乃るり後よ式アつ三交の句兵部

也

いし乃いよとをうし中ゆはひこして

ゆふれ女御のをいよ上中ゆつり起て又世よ

の和琴を源氏よまつり也

うはふはうひ

よせあられ下勅葛木品をうり奴に

あつ(か)りて律のめき合ひ初を後
みれうてはくひち

是よれふし

アムノて

アムンせらじ

アツリ声丹みかきくうりて

呂より律より

きんちこくれちる色

五箇也 見河海

五六乃らちと ハラハ

後未丈一 禪岡

春煉よりけり物小かきつばちる色じてめよえ

~~~~~はりけ

時かきくひ事よあれて細うらるんつ

ひりりとくつ不あもる

ふんきんあられ

七八歳らんて

くれ帯少く君よ

むうはく脈のんて

よこ帯れ君

父方の山子

ふらふら

山子

宮内

女三

山子とてまらば

女三の源氏

わらわ

雲井

故大宮

攝政小方事

三日

日とて

源氏

く

言

く

上流

ら

さ

いとさぶく  
平と取

うねきくまうりて  
あくおてい幸乃うらさけ也

昔よはうぬ事と

世に幼かれ所の事

いとくくぬく人

世に上諸事具して有部

ふとくろ世七じうぬ給

源氏十年をとりとるらん

若世よせうらんりり  
うもりか河くし  
成せら女の重危  
お傍の

小山伴郎

男けく

源氏統

かか

次テの事

一う

し

きと此とらひ

しめいんくくむにむかへりて

この宮り

女三子の事

いせのりては

自母の事いふ事

おぼやかし

書上答

ゆくゆく

されん

ふとーもかく

世七の女れ大厄

世れり

源氏物語

大将のく

葵上

さうと

賢なる也 女りあわさ

い

いふ事

秋好中宮の冷泉院とれく契へしりて  
申あへたれと也

かろせりうくもこれされぬん  
後の世よと也

られら方の

ほくらの女あり

るいそりれ事

明る上を山うらうと也

みとんち

皇上院

ゆらり

源氏語

君より

く海なきいとちかかれん  
もと也

きしはく

物えんしとら

まは公をくも

青女ら宮のちか

ちかぬるも

いさよれん  
昔物徳也色けりけり男もさそみふふ

大方古語もよぶまゝ

女侍乃方より

明石書れらるるれり也

山

源氏乃事

形二可と如く

いはくともかきしむる事

と

いふ病ハ言ふて又多し

後院より

朱草也

いさくもおおひしむる事

事

出たれ事

宮乃方い

女らあり

これ院より

六条より



又宮乃いともはうして

四名中宮の腹二宮也 又白宮也 和歌なり

女一宮也 事あり也

永正九五 又 養房 状の女一宮也 中後

以迄 忍之 尚合

移しくうぐれ

原成緒

けしき

大事よいあししと也

いと時乃人なり

西丹河あし

山河孫の二宮と

女三乃姉宮也 落葉

あくさあしをきし捨て

月をみてあくさあしをきし捨て

てもあくさあしと也 只なくさあしをきし

公肝要也

小徳信とよこころいんちあれ山徳信のあれと

乃むとあしり

とよとよあしりもや女三あれらあしのと

院乃うへに

朱菴院へ女三宮れ事と人れりし  
源氏乃公とと事多しに後始し  
源氏もさう人かれと公よ入るるす乃所  
うあて甲く公やと此とと朱菴院思  
合もる也  
はるさる  
右束の譜れ事  
かとして

女三宮と右束の譜れ事と人れりし  
むかよる事

朱菴院れ事と人れりし  
少事やとおほしき事  
とつり

ふりはさる事と人れりし  
し

中細云よなりと人れりし  
位よなる事

あしにいまのゆん

小物後がし—子替りりともあつらん

と也

あしにいまのゆん

業平清和女に一通—

あしにいまのゆん

あまをえよのふるはなほわらうとて

なまをえよのふるはなほわらうとて

あしにいまのゆん

小物後がし—とゆふしあつら性女宮のあし

あしにいまのゆん

あしにいまのゆん

あしにいまのゆん

あしにいまのゆん

と也

あしにいまのゆん

あしにいまのゆん

あしにいまのゆん

あしにいまのゆん

あしにいまのゆん

なり 毎年ハ中年日

上ぬふあゝあゝ

物ぬいととらふに叶ふ

阿せられんを

如三宮方よりくわくお女座

源中将

按察為おぬふ人

さゆても

これかよの事また

かふらも不ア

ゆつろきまじ

寝可らとらふ

うこつ

督君公と勤

きあつて

公よ制

はとりのあつ

実事かとい

ひふらなほ

交とが

升てかろ

業平二条后と具つてなりし事か

とひ准と

かあにちらとゆん

兼中へ之をよろしあんとしふり又

そしつみいしとわみちるん

ふよいよきりゆると

余れ事也

長ちるあつたりと

指乃尺しゆめれ契と事と

かあにちらとゆん

おほしつらとゆん事と

指乃尺懐妊とゆん事と

おほしつらとゆん事と

正徹うらつらとゆん事と

とく 弾容いけとゆん事と

とく 又云つらとゆん事と

い末河今おとんといふとゆん事と

きり 帯本又ゆつとゆん事と

きり 帯本又ゆつとゆん事と

後撰忘三同中 は年古多し  
下助入

虫三 渡川さうし孫さあも何家ものど

くふらりの家や何なり

恋日 思ひ物とともはまうきんじひの

ふらふらうわゆるあや

女宮れいしむもゆきて行て大敵つそ忠

ひてはく〜あや

一葉あり 茂葉のあれ方の入知くそ父れお〜れも

と〜り知ぬ〜

ふららるる葉は〜

女にあま〜らやまらて罪し何ら〜

あ〜

上陽人あ〜

〜

せのん〜

うれを〜

女ら〜

〜

い急上の病氣よう〜

かろふちられさ海

山王事

まはりの日ちる

月也

女宮

二文高き

くゆくそはこころきふりあひま

搦とて罪と犯とよあり

女ももふ

二文

いほしき

女三宮とえとふと

りあふはる高き

養桂れろくおらまよふ二文と

ふあふ

いとあめりなる

二文とさひおと

かの流ハ

二条院

ゆく

曲也まうけらるる

不動尊乃のりよのちりひ

見河海 善无畏三藏之師 欲喊

牙子為之灌頂善无畏行法悉受

灌頂甚后猶延年之事 云々

てうとてれて

てうとてひさせ

おほしうとせんと

雲上とてとんと

今よりわうとてとてとてとてとて

仰息取乃が身乃にてい海く一養

業とてとて

我乃とてとてとてとてとて

物乃字れ文之それううとてとて

とてとてとてとて

物とてとてとて

養妻とてとて物のけらうとてとて

中宮れとてとてとて

姪奴

石とてとてとてとて



生前死後よ公かろふにわたり  
おろし(まて)も  
子の事と思ふぬよと息なれん  
公まじい  
いよととらりお事とよ  
るふくく  
省るるる  
うらひりりり  
息なれん中よとよよよ  
あつりりりりり

靈ちものゆりりり  
可と比なり  
るるるるる

忌別あり

佛神の守也 深哉  
かくらせ給よけり  
いさ出まふ事と人ちるる  
けよ乃ゆきん

賀茂桑音ちるるるるる  
るるるるる

さくらんぼの  
はよれえとくうふはなりのよるうね  
とつた  
る舟とさくしに  
まてとつた舟ー うれはうのえし  
二品宮  
女三つあ  
もれらねほえ  
平甚のえあつ  
まふはととくうー

祭の後の目細さとみるか  
何うきせひくうー  
奥入程くちうー  
比事くそせいとも揚るー  
式子宮  
比事上父  
大將君  
つた  
折ーふさ海よ  
柏木流

いととりにく

夕暮の語

あつたおくりれらうううううう

あはしていおとろくくくく 福園 又云望上の

ふ事一ほゆれの中乃悲お宰翁と帝

ふりうもあまきり 又云自中ううぬふよ

やまうくすこのあへ 柏木公

いむもれさくれさゆり

津梅ふみらうくても

望上松上れがとりにく

あうくく形一けりり

あうきく

あきやうりりりりりり

ひきよれん

あいとゆりーくても

あをあうーとと

六条院あうりうき海あも

以前の詞よひきよれ病をばきくうりーゆふ

うりうり

あいのやま

拍木女らまよみを通り〜夏長し  
あくるやいほりのふ

懐妊す

尺なりさうめて

懐妊とさうりて

院うもくもせ給事といとあゆさうなること  
けあやみ恨をば

女らあれ懐妊されすとほあやみ恨む  
ひのう書して音勿御と

まかり給

土条院へ源氏とさうり給とあまそいまま  
二条院のさうりとさうり  
あつたさゆふとさうり

あつたさゆふとさうり一ひのさ白糸の極く

あつたさゆふとさうり

あつたさゆふとさうり又いほりてあつたさゆふと

あつたさゆふとさうり

蓮の露れあつたさゆふと

あつたさゆふとさうりあつたさゆふとさうり  
あつたさゆふとさうりあつたさゆふとさうり

つとむふとよあり

あくる雲明に

禁上れ病のしほやうきなり

山公のあや

心れらのしつ事と人かろくんと

公の鬼と也

例のうはるぬ

懐妊れ事と

あらうりら事と

女三宮懐妊とほ氏れ不審して

事しつと思ふよと

或平梅と

二二日

少のうと

ゆみとの

保氏せよれと

わ君れらやゆらと

女と也

は人も

くしと

うゝいハきーる

うゝろかんぢり

今の世に抄巻くがほりとり

山阿弥をよき語て

是ハ松廬也

ふふとねれとこへゆい

乱うた也 一可葉守 乱とゆい

二也

れ乃抄小あまじ

保氏乃の使人とふみと

あかいとけが

保氏れ也

とこあ

別也

ゆゑりれいと

小ゆけりて 保とふ人か

ゆ

か

女ニあれとけりて 鞠れ

え

は中納言れりふいふ  
うづね女座るといふ  
りーかやうよ

源氏れりしより夕影のさゆをりあさ  
ゆよあまふてとらり 治てれきり  
朧月帯れ方へ 意無なき海の川いと  
古跡つりめちあまもとの月を  
あふよとほれ

懐妊し  
まゝくらくと又ながきいふよ

女三文字  
律門とまのいふ

帝のれりてあまよふまをりつと  
悉乃ららひ

いさくらとてれとあつと  
あつとあつとあつと  
女君

女君  
ひき上封

日ちらひはつと  
女らあれ方へ源氏れとらつと  
あつとあつとあつと

乃みまうし  
家ちあは

女三つあは

けふあはらに

あはらふ人ゆい余あまひあつらん

あはらふよこほとこれあはらふらん

あはらふ公とありあはらふらん

あはらふ

あはらふ人事

あはらふ

あはらふ

あはらふ

あはらふ

あはらふ

あはらふ

あはらふ

あはらふ

あはらふ

あはらふ

あはらふ



いとや志ばやういをみくさ

女三宮辨

よ此やうとてせぬまらり

柏木公六条院心いと之をささる

あゝ思ひいふ形らねよはきて

深成れ女三宮と思ひいふあらてみあわら

小三つて海舟

女御の御まらり御うら

明石女三の事と深成の心ねふ

右乃おがとれ水の方

玉はつら事

いがとれ

舞足

じろんの女房

弁也

笑う事申らるるもきれ

舞足と玉つらとの舞深中らるる

玉盤乃公とつらつらもさういとも

事申してさうもきれとくつら

ねいあさうらふらうもさうも

ふといくくそておし

おろくの公

二條乃内竹のうんれ君をば

朧月夜れ事

此舟いづほいのとも

おほろ月夜れ事

阿まれり余一あるらるる

朧月夜の君よあまふとも源氏よあに

さか人事くふとほつれ事を誰かたと

徳より

おくおろし一毎らあ

源氏母さ海いひりきねん

あ海船よいうち

源氏もめちゆつよ次へ一りねん

我もい何にそつれあふとねねん

ふあり我ゆつれ中よあふあふ

ふきみよう一ねん

あやろ月夜れ事いりうとつるん

女君あも今ち

朧月夜れみといふよにせねん

あしおぼとら出家一紙し  
ううしあれきききんと

源氏の出家よとられねと請あり一車  
とんいぬのよまみおひり一車

車院ふという一はこめて

尾よ浅多しあうう一うてして三

うく思ふさ海一うさうひさり一車  
れ一

横舟はくもく一海くありあさ海ふ一  
おろかの舟也

あまこころくよ

源氏乃公よ今よりいあまこころくよ

とや 和女も

ま宮公は一て

今上れ女一あも

みこゆらめん

あてしこよまはし一とあおひ

ううこゆらふ

人は嫁さうも

いあんとて

妙く命を定むる養せんとす思はし  
何れも

まゝにあらはれぬ

朧月夜に居よぬ影しるしあられし

方れ女心をまゝ試みしは

はくも

金根細文のしるしに細文あり

由之と稱しししるしに屏風木下

うん楚也

く月を大おれ

夕音れ母養上の忌也夕音れなれと賀と  
取おすよよと也

かゝ月也

仏徽殿女御忌月也

みやこ

花一日本紀風姿と也

姫君まへんのくみやこ好人

女三文

うの月也

女三文高紫朱菴院のくきりし十月

かん乃君也

柏木朱萑寝つあは

宮もくらんて

女ら文

ふとらゆきれおほく

はまよれ病言らとひまきれて

しら海りかよ

朱萑寝れんせの入れ禁中かよの事

とをいおふと

いとくか

源氏の公

お思う一はつは

くひしとあがり

い

朱萑寝る

清公よりむ

女とあれん

い

朱萑寝のころりもくわさく入れ

但女にうまの公や

又今もあまの形くさるゝまゝに  
女三あれとけしと也  
まづひき  
源氏のみ  
とほとておしん  
朱雀はくち  
うの外れ  
院の清世れ

朱雀

少人乃きらに  
昔も源氏れうと  
かやの事のおと也  
二宮入

落葉

少人乃きらに  
女らあけに  
十二月を乃け  
うととほ氏の父  
桐壺帝乃清世

月也又義 朱雀院の父仲門の己卯と  
木公ゆかし小乃字ぬえしとあり  
乃んよはあてしといふはきくし  
浮舟の志をかたけしとあり  
如らより 浮氏公  
と記すれり

柏あり

ワキしふより

猶のうへにありとあり

十有日

十日ありとあり

女御の君しふとあり  
おの多しれりといふあり

い事 語し中 永正九十五夢

い同 一勅おあるといふあり

宮明石中宮殿 忍句ありとあり

とあり

決り

とあり

とあり

かろ沖くじ

あなま

かほへつめ

夕暮れ花散里れ方にて細き

よとて源氏沖くじの事とて

後くしりし事とて

あゆみ

きいり

源氏や柏木と常に沖中

あや

うの事とて

源氏の流

みこけ

女宮院の

家よか

源氏の子孫

みゆり

脚氣事

はく

は仕大后



急案りり

いっせーくせー

女三女乃々賀一々よを後仕乃おとれ

おなりーまのいなして女三宮れ御賀乃

あつよ申をはいっせーくせよを源氏

ほめゆん

あまの形ん

源氏討 早下付

は院

あまのやぐぬん

東乃おとじて

花散里方

ところいらく

柏木乃ところいらく

けらる所を多よとらうるね樂人可人

きよハあつよねとらうる人舞人れ賀え

仙遊乃とらふおを

右乃おと

舞思

あまの宮

堂

源中納言乃山子

式了の宮れ孫也

山しまこれ

孫連の舞と感一も之

河一の沈

源氏

東門猪公とてあて

柏木なり之む也

今志る一のん

柏木とやうて老々んと也

うゝゝいゝて

源氏とて解之

ゑいにをりぬ

柏木上戸ぬやし今ハことハ酔ふと也

らあぐにて

一条宮 高葉 あり柏木とてははれぬ所の意

御一始

女官入おほしぬ家

女二ま 高葉

くく宮と可

落葉文母也

さ乃事として

母と息女同柏木とれり

おとらりや

柏木とれり

さゆりくも

柏木余乃事と云

えゆきやぶきと云

女二文と事していりゆりくも

母小方

柏木れ母也

人よりゆりりける

柏木の嫡子とれん也

なりく海り流ぬ

校仕れ方(柏木とらり流

山賀ちサわかに

娘とれん公と

女二文と事

五十寺の

六十賀よりなり  
かりまひちいそ

仁和ふ不唯と仁味寺れ圓堂れ中尊  
金剛界大目也 仰らひふさあのはふと  
ひん好ふとひんをぬくしてれと針  
書留より

人の心をくひと入つ  
朱菴院へ出家乃後々れかろゆるなり

後漢書列傳

逸民傳

韓康字伯休京兆西朝陵人常采菜名  
山賣於長安市口不二價三十余年時  
有女子從康買菜康車價不初女子  
怒曰公是韓伯休那

那語餘言乃不二價  
午一也乃賀反



川あり くらもせいにふよぬれがふん  
ぬるれとらとせのね形くさくに 小町  
かきれあふれをも

うく思ふぬん乃衰ととりり  
いとひ思ひよ

交出乃男と

ら返しいとららさか

妙入

侍伝はも

柏木乃女のとれぬ

うはきからり  
ふりひり  
いおとれ今葉面一紙と云  
は(一)と云

むさう一ふ公 権中 敦忠 後三

天慶六年三月七日薨 亦八時平云

三男号比巴中納言又本院

いしくとぬく

時平云三男 敦忠中納言 同十二神名  
号 絶入事 去々 膝病なるゆへ

早らん毗羅とらひく〜んと書か  
おとろく〜物と〜

〜者とも〜  
喜也

ゆ〜れせは〜一日十日〜  
葉年二葉后とめて〜

〜  
けふも〜

命と〜  
えられん〜

う〜

〜  
のあや〜

かう〜  
女〜

〜  
猫〜

〜  
公〜

〜  
女〜





男子のなびきりおとどけしはしるす  
らぬ方何うと深ゆれ思ひふし  
女中へ又何ゆいともうしはしるす  
しと也

官司乃大夫かといり

明石中文まよと也

しとひるんやう

い物候新むじくしるすり  
い中文明石中

まよと也末乃詞よ大夫りしと也

五日れある

秋好申寄りし

いもえんし

いっゆるす

大夫より

中宮大夫

いづ

いもえんし

女中あれ深ゆいもえんし

かきらとていづる人

いもえんし  
いもえんし  
いもえんし  
いもえんし

いり

東にうけて

くわゆる

源氏の心を好く

山公乃ららに

未嘗れん

阿はもとを素なるとし

女三交を源氏乃ららに

形とあつらひ

あは

はま形くても

女三交を源氏乃ららに恨み

公あは

えう徳り

源氏れり

いせぬ

又三交人とあつて

女三交とあつて

乃らら

源氏とあつて

らうとくしーしー

いさ上とりち御一拾うらうり六条津息  
一見雲々

女宮の

女ニまゝ

いはい

柏木乃女ニまゝれう方一集りてんてまゝ  
せん

二子乃宮の事

朱萱流れ女ニまゝの事

あつちま

不堪契也

が女乃れちり此れ

右大弁乃君小う

紅梅れおととよ人

大將君

夕香 或がた大おき 持任事 未見

ま 但着茶上よんてくわね

みく

くーらくかとの對面





女三又屋よお給くひいし

女舟袖 始りくし

男子あれし屋よ安くしういし

とて

色くくかさるりう衣新 船次いふか

くもれ

い海くし

上より 紅梅しういし又深紅より

くく近く出あしう色あれし

めもく海

くく赤くあひあひし

うくく

涙れあらしせそ今もあましおつる

おほくあつる

柏あし

女津乃くあし

明る中宮殿宮連く

ほあこめ

眼乃ららの極

まはるよ思ひて

樂天句也

あ十八と

東天句 是河海 源氏の中十八集氏の

るり

かんなり父よ

樂天句よりと柏本れるを下よれ  
つり蓬に別して父よいし海より

まよ也

い事れ公一なり

女三と柏本の媒し

かひいんよ

源氏乃我身れうとちうみれあまりよ

人れ思うん事いそそと事さそそいあん

とつるちい多し女れさあそのあし

うう形系形えうりそこめ

私じとし垂くくみれあしひるりせは

いそ源氏より後方よやあうらひいり

私にあさうあくてそあえ

あまい

あひさういうへ乃小松の弁あとり

出る河

あふいと

女らまゝのけしき事さ思ひ好む  
と也

すくおわやえり

柏木よりりしと也

女言れくせけうじあはれしは

夕音乃公

打りしち

柏木よりりしと也

思ひり始

いとあつとてふはめて

柏木れ新と云夕音れ定ぬてく思

好也思上と思好ておらりしと也

女君かたじけなく

女君かたじけなく

やうし原

ほくち

は張を信進子絶しあはれみち女乃

さしきくもとも誤り也



我がまうせう

後仕たる統

中くろきぬさりよ

父れ子の事よ心をほくひらうりてま

乃冥運れさうりぬらうと

一冬宮よの御して

女二文柏木家也

みかゆくあうく

鷹釣かとおぼるまよ御し

孫とめてぬを

徳人の海舟くめてむれ申す

大将とのおりにあはるまきり

ほれぬといゆくあといはれぬを

御息所

如うな母

いしき事

夕方の統

種わかむとの

二月年中行事よる

おやうなれ

況や女二宮乃多中いとり

哀なる事い

ら息可頼

おほい入る

女二交歎乃る

る

柏木事と又少方乃何中く女

と

近ぶいあしひ

柏木と夕暮る

うめけり

柏木れり

男ゆり

息子のれなる

いけりれれ

いはい

か

柏木乃早世と

と

い

夕音乃いせまふる一交とてくらり  
はらうとてと然ようあつひはり  
事あり

いへはららり

あへんまね生よの女交と申とらり  
あなりしと然よのいとさけり  
るかなとての部を

いとあよけり

夕音訊 柏木れ性と云

夕音

花一又色不及くぬとてうらうの明な  
るるもとらりけり

か乃君

柏木乃夕音より又六年後より

夕音

けり

男一

いへ

夕音乃の女交を移す  
もつらうとてあつひはり

いとねほつり

くまうれしうと

女二と柏木と二人れ一人抱く

いまを柳の

う息前よりれきし目いそと目よ涙

れ事しとせり

いそめれ

常の勢

おちのけしちりも

親の孝<sup>教</sup>とふをううならし一人をれい

つり

君のいんく君れ

較仕大臣乃流夢れ事とよ

くまうれしと

柏木れ事と云

あううう思つ

柏木れるをうく勢くを位にを何ふ

しりし次句くもあううらうちりしと

恋れと

はそあとも然れ

月夜乃さあといはひり目とこうとを  
うめねとせぬと

えんりあきてあめね  
ねとくしあきふんくみは  
物さふしあめいん

いぬくくく  
く息あれうよ書きんねし  
かきみの衣

星乃ころもとうり 同云子の脹を親  
れ若く事定てらけよや 一答親の

子れ脹と恙と事 句締し今とそ  
あし

弁乃君

紅梅れおとあし

人おとあとお方と

や弁乃のるし

さぬんことし

父雪か小方とこのと對してきり大

おれとあぬとぬれあふ何六別し

連いりさうねり

夕雲か一葉れまゝの後は

おろろれの音

こらゝれりや

いよ決

服者の面れ揃へ 一言葬家くれば

しきしき 同いよとくけりて 柏木其

よは葉宮よのりて 眼をれ家のゆ

まやあや 葬家よあひて

きふいよれこふぬねへ

夕雲をいよあも内よ入ねくぬちや 自然

ばきしうーあふと

道理乃心夕雲女まよふとくけりるに

よひてや

ふとるは

あひるしんて

あしうなよ

ちりくばあんと 後撰比巴るれう

うりもいよあひてまあり

かーんもい葉もれ

柏木と思つていよあ息下れあすあ

私云女二あり

少将君

女二のあれいともや

いさうにかきりあう

私云 悲しきれもりあにありあつたうりとも

はくさびと并てあひらきま

いぢやとまうてさくふとあひらきま

おほくちひく

夕音鏡

い高より

女二あれ事と夕音のちよあひらきま  
いさうはくさびとまうてさくふとあひらきま

今ちれ昔は

い語ハ高座のいぢや

あつらふに

あひらかさうり

ほおし

源氏つる

これハ

夕音の事

ゆききくくんはふ

高府のまれの事一記を記して人

甲ふい句時平云乃おとの男保忠の

秋なりとをまと取入て実証さ

見河海保忠事と右の軍と作家大

将れ唐名とははの軍と号と羽林大

幕下一樹一と云又たか大

と唐名一金吾將軍とつり爰は

此是といと近きせれ事うれ

私勅大納言正三位任陸奥出羽按察使

兼行右近衛大將友原弼長保忠兼

平六年七月十四日薨ウナ十七号八条大

將時平云一男 本朝凡そ元伯保

忠事い物語乃時代より一される

さてと養く物してきく近くうら

りふ事とを忍る世中よとりうて

い人をあーじとつり

今よくの 柏木は舞の師





女三官の居る如し  
多しれ

在例

る十位に

公乃臨ふ書如也

春の妻よ

去乃来り華もま

入り人乃

六入形人乃六道父子れる各別也

蘇同身六極末の

いとく養ふま

法華よかきん難解秘入れる

そくいさあ

らいつと

秘妙

書久持つ

みと半智

う年せよ

世中

りぬ

六条院を離きけり人事と恨ね  
はみえわく

女三あれ居よ成好ひしと源氏の  
惜くちねん

これこそんり

唐小文多く同云唐れこそんりのこ

い唐のとりおとせあやう一答  
可然

女宮物しねあは

明石の腹交あらしめいふれ事く

花乃らりり

柏木妻よ夕音のひやと冷き内分

あま公をかくけりこよ余ねし

とちねんよていとさしねんねん

子連れさうりいさ(もれとねん)

いと袖らきふちさみさうれと

源詞葉事也袖らけいさうらうねよ

うき少し

柏木事

のていふ形らて  
筆<sup>ツギ</sup>放<sup>ツギ</sup>放<sup>ツギ</sup>多<sup>ツギ</sup>し又<sup>ツギ</sup>董<sup>ツギ</sup>とを  
方<sup>ツギ</sup>は<sup>ツギ</sup>く<sup>ツギ</sup>れ<sup>ツギ</sup>く<sup>ツギ</sup>せ<sup>ツギ</sup>も

源氏も不<sup>ツギ</sup>満<sup>ツギ</sup>と<sup>ツギ</sup>れ<sup>ツギ</sup>る<sup>ツギ</sup>も<sup>ツギ</sup>と<sup>ツギ</sup>し<sup>ツギ</sup>の<sup>ツギ</sup>上<sup>ツギ</sup>と  
那<sup>ツギ</sup>合<sup>ツギ</sup>又<sup>ツギ</sup>女<sup>ツギ</sup>之<sup>ツギ</sup>交<sup>ツギ</sup>よ<sup>ツギ</sup>ち<sup>ツギ</sup>く<sup>ツギ</sup>る<sup>ツギ</sup>も<sup>ツギ</sup>と<sup>ツギ</sup>也

多<sup>ツギ</sup>少<sup>ツギ</sup>は<sup>ツギ</sup>こ<sup>ツギ</sup>も  
柏木女三<sup>ツギ</sup>お<sup>ツギ</sup>り<sup>ツギ</sup>罷<sup>ツギ</sup>し

ま<sup>ツギ</sup>る<sup>ツギ</sup>流<sup>ツギ</sup>ら<sup>ツギ</sup>ぬ<sup>ツギ</sup>  
又<sup>ツギ</sup>音<sup>ツギ</sup>の<sup>ツギ</sup>二<sup>ツギ</sup>条<sup>ツギ</sup>を<sup>ツギ</sup>あ<sup>ツギ</sup>ら<sup>ツギ</sup>し  
そ<sup>ツギ</sup>ら<sup>ツギ</sup>よ<sup>ツギ</sup>ち<sup>ツギ</sup>く<sup>ツギ</sup>人

律<sup>ツギ</sup>を<sup>ツギ</sup>女<sup>ツギ</sup>い<sup>ツギ</sup>ら<sup>ツギ</sup>り<sup>ツギ</sup>妹<sup>ツギ</sup>お<sup>ツギ</sup>り<sup>ツギ</sup>事<sup>ツギ</sup>り

か<sup>ツギ</sup>や<sup>ツギ</sup>る<sup>ツギ</sup>ふ<sup>ツギ</sup>ら<sup>ツギ</sup>り<sup>ツギ</sup>よ  
く<sup>ツギ</sup>つ<sup>ツギ</sup>不<sup>ツギ</sup>乃<sup>ツギ</sup>物<sup>ツギ</sup>鏡<sup>ツギ</sup>よ<sup>ツギ</sup>ひ<sup>ツギ</sup>敷<sup>ツギ</sup>を

お<sup>ツギ</sup>ら<sup>ツギ</sup>く<sup>ツギ</sup>と<sup>ツギ</sup>い<sup>ツギ</sup>  
女<sup>ツギ</sup>二<sup>ツギ</sup>の<sup>ツギ</sup>ら<sup>ツギ</sup>琴<sup>ツギ</sup>今<sup>ツギ</sup>お<sup>ツギ</sup>り<sup>ツギ</sup>柏<sup>ツギ</sup>木<sup>ツギ</sup>の<sup>ツギ</sup>ゆ<sup>ツギ</sup>来<sup>ツギ</sup>こ<sup>ツギ</sup>も<sup>ツギ</sup>か<sup>ツギ</sup>  
い<sup>ツギ</sup>と<sup>ツギ</sup>也

琴<sup>ツギ</sup>乃<sup>ツギ</sup>と<sup>ツギ</sup>多<sup>ツギ</sup>え<sup>ツギ</sup>し  
息<sup>ツギ</sup>一<sup>ツギ</sup>本<sup>ツギ</sup>討

女<sup>ツギ</sup>宮<sup>ツギ</sup>多<sup>ツギ</sup>ら<sup>ツギ</sup>の  
女<sup>ツギ</sup>二<sup>ツギ</sup>又<sup>ツギ</sup>琴<sup>ツギ</sup>今<sup>ツギ</sup>と<sup>ツギ</sup>と<sup>ツギ</sup>く<sup>ツギ</sup>り<sup>ツギ</sup>る<sup>ツギ</sup>ふ<sup>ツギ</sup>と<sup>ツギ</sup>也

——と

せれくあはまふと

見河海ちちちふつとくくあかしくあ  
うせれくあはまふとくくあ

愛はての琴かとりんもれ柏あれる  
とちちちしてあはまふたれのあ

とちちちとくくあはまふと  
かちちちふと

あはまふとくくあはまふとくくあ  
とちちちとくくあはまふと

夕音のあはまふと柏あれるとくくあ

下あはまふとくくあはまふと

あはまふとくくあはまふと

心楽傳情よまらちと夕音の柏あ

あはまふとくくあはまふと

あはまふと

比巴川

あはまふとくくあはまふと

柏あはまふとくくあはまふと  
とち中あはまふとくくあはまふと

丁也

く孫ららう

雁不亂行いん也

ゆれおとを

和琴をと夕音のうさめねとんじうて

華をか引ねん

思ひとまじうほなり

早下切

おとらつとせねあぢくや

うらみおれりよとんじておまふよんじ

ねん也

ゆそけくまや

拍木の事とおねりりよれらねん

おとといていんねん

女宮れ拍木の事よんらねて川ねん

事ねいんねんりあおまうらとんじ

うらみおれりよとんじておまふよんじ

あはとも 公よ下り水乃とんじ

いんて早下りりよねん

ゆよねれ

あつみれ時常あ的事る感  
あつ  
ふとちあよ

言にいくそいらくあらんいふあよゆさ  
と云ふよてあなりと也

昔乃らあや

柏木事

あよむれらああ

あ息あ約 縁因又あ約さくし夜れ而  
白さいハタあ乃振と人ゆさあ

只んく乃思ふより一物を ねえ人ゆの  
とあや 花乃しく夕あ約あれ結と  
あよさくあれとさくいはまにああ縁  
あそあ約し又云是と仰息あ乃約よま  
あてしあれあ向さあさアああれう  
あそのああああ人ゆさあああああ  
あああああああああああああああ  
乃川ああああああああああああ  
ああああああああああああああ  
ああああああああああああああ  
ああああああああああああああ

けいおもとてや

北こころとしよふしや  
（清い物といはれ  
ぬなり）

夕暮の霞也

あのをいせんくらも

るまをれやよらりあふへるまて

ハ思ふいされん孫多しとや

みさ此よ青がらん

いさかしの声よあつとて第の舞れん

とさるぬりよよとや

あけくさぬ

夕暮の霞の勢よとぬまふらうて適

夕よの霞なり

いしとあふ

柏木とあふあよよそあ雲今しき

ゆつされ物なり——い帯をほくらん事

いしとあ

霞ちりさ

仲息あふ

ひあ——くわう



柏木事

いしと何事と

思河海とされといふいふいふ  
わたり 新云 舟くらとを井石れ一  
まきと妹と云とくえはうふよや

月乃ぬ里とよきをり

里とくもり好晴

あふふぬれ月よ

かくらり行ーと思ふ古今のふらふ  
て書り

いふれんこ君

柏木の女二宮よあうーい行り

や

スふれせに

浪がうて ちてんとうらに  
まきと

わら甲の

雪井石と夕音との中し

とらりし

夕音宮をよそふれらるぬれわら又あ

乃公がきりよりてを弁あれがうらん  
とくめとく

吊竹よ吹より風の

柏木着申かよるも風よのきりて  
うらぬみふゆとくねんとい音  
律よ皆声の初よ付て吹あつる  
そのことくちんふゆとくとくよ  
蕙よ傳つよと也

とく乃せむらき

蕙の方へ傳つんとて吹才ふつとくか

らんくおりつることばに花をよ女二乃  
事とくさ不てあれ

はく

和抄よとくむるよ乳うとあまひ事  
とく

みくふ

髪と耳よんんふくいかにし柳し  
や弁乃の折

いらぬとくくうらんと

乳乃おさう也

むゆり

柏もれあふよさくらしむりて何とぞ  
かきれゆき也

とぬきよ

又ほおれ

ねはふけ方乃寺ちうくし極来るふと  
准とそ哀業いも

女師のうきよ

ゆふめ

ふちるじう又とらりきそ

三宮 白まは志が女一宮ともしふ交はを  
ね子よ志ねひりしうすき業よれ  
ふんちりまは

大將

三宮乃ふひてのね

あしこゆりて

ふあれとうしこゆりね又業利  
ゆふ女師乃うきよ源氏がうまねるか  
たて

みよのまるとは

楚上乃方れまゐる

いとさやしく形せん

夕暮乃々ゆきとまじくしんせうゆり

のねし 軽くうりり

うほのかくきん

スおの氣を人のまぬやうくきん

二宮

六条院多つもの方は急上南乃きん

女三うれ中の程乃君明る女神のさ

えりーの如れう方にてのさゆし

より君と

昔事

ふりうき

ニヌれは子よとこいふ女一公志

しらゑして

源氏の乃ゆし

三乃々存り

源氏父妻れ事とのね

もより始りんとひかよ

源氏の常れう方にて いさか

宮乃ふもつハ

女三宮の志 葦ののり

と伊乃きりとさそ

同 葦ニヤサてのりし 乃

一答かふれき時れちしーいさーぬきし

とふととぬきししてらふさき 頸紙の

へふらぬと小神のちよふすのし ぬきつと

ふいあちのしれととちしーぬきつと

ぬき也

かほめこまら

夕香柏木乃事と思ひし也

いてりし

夕香乃公よりらるし也

ぬい

思上方

けくみく

夕香乃公よりらるし也

しー乃事

古香乃公よりらるし也

はらし ぬきんれ

源徳之いかにのありしにせしむおとせ  
れ公よや哀如くおちしとせ

想走恋乃中まよやいかに會れ事と  
思つり

さか一方れ公さしと

夕暮かよ源由のそしとけり

公乃さしと

つりてせれ人乃あしつりしとやむとん  
とせ

公とさしと

夕暮乃そあけしにそし川あしと  
身はしとみつりしとそあけしと  
とせ人かしとみつりしと

陽成はれ山帯なりそれと古式アツ宮の

貞保親王と見河海枕園式アツ

新れ人としとせ貞保こつてのれ

也い物続いゆくとめし事とそと又云は湯

成院と桃華とそて宴とそと念得

と

蘇乃人

相遠る 花矢帝式アツ紫上父有乱

荒事アツ 枕置きて寝る

ゆア

あふ人

夕方の句 和源行

こつと

源氏河

ふふ

旅去人 思河海 又ふれ

と

おほき

はる式アツ 他と

鈴虫

いそぎ豊乃葉也 源氏め十家新中これ  
事也 夕音可成

ら乃沛丁れるひくをよおりてあうう  
けく

いまもお佛堂をめてくまひ女ら宮れ  
らるゝをとお佛堂にいさういひる也  
同云 東沛帳のやうな 一巻よりこれ  
帳常の性急くやうよさぬのうひくを  
あれう也



花乃ち氏

蓮華なる

あられ百歩のくぬえ

昔々唐れ方を用品

荷葉れ

是は日本の方々

の蓮をうわつて是を玉を伝て

きい入ても也今もあつ事也人

尋ら

しんとかう

蜂の字とあき

うれとにいせ

女と浮氏のけせれ契う

よ

らんけきくはく

本を今も唐さ三寸

まはやしてけつ

と可くよ

入てあむく是則佛壇

是を沈

そとゆえ

うきとんね

ひくみち也

ひくみち

又、新きとまきし 和の音に

まじりぬらぬ

女にまのぬくしとゆふ

ひきし

とこしとよららるるし

おゆしとゆはりぬる

女にまのぬくしと佛よゆらぬ

蓮葉と

五會讚 和云 ぬくしとらるるし

乃事しと契つとらるるしと源を我と一蓮

別よはまみぬくしとらるるしと

ぬれりぬ

今ハ別しとらるるし

かきとぬ

居宮乃殿也

君の心也

ふみゆへとら甚じとてゆへと也  
乃一留人ち

縁屋がたとへてふらん人

ゆづり来とゆへ

弁後

院よゆへもせぬけり

六条院よ也

ふら宮よ也

三條宮よ也 女に交れとゆへもよ

可也

まらゆつとみかて

源氏とせぬ

あつとゆへ

女にの交れとゆへもふ方とぬれ

可也

少ゆへ

くらとゆへ

居よちとぬとゆへ

例乃らぬ也

女宮の也

十六日此月の

八月十五夜より養うる一なり

中宮乃けるけき

妹好くすく

く形を治つてふさく

冊ふともり放るをふさく一ふらる

くなく一書よさむらういあしと

いとるてをあら

相虫れ人言ひせとある

まいより長らり

逸者其群示り一と

月より出て

山養乃詞よ月いまる新く一あふ

と

大將君

夕雲かともく一くてまらる

ふるまひ

女ら宮く方

いとほましくして

源氏乃約

古様大御之

柏木 私心時をありれとていよー

川をたぬく

いとくはさうりー

西麻もや

みよ乃ららに色

女三又柏木れをそまのあつて

肉もい色

まよも柏木と思ふひり

さうりあしとらとまきり

け討冷泉院よりれをくうこ乃ま

ほせ

おまひませぬ

月もこまぬを

おのりー

あしをれをのぬく源氏院より何事

しぬぬ

月影のたる

うとこれぬ妙之源氏早下乃ぬを又  
別乃ぬをむじや可尋冷泉院御位と

さうゆーませとも同く是とふふも何ふ  
廿七

右東の替 右宰相

帯かき

車入ららして学入

いぶりーふり

源氏れさ海とほむか

新しうみぬつ

冷泉院廿三

中宮れうふ

娘好中宮

むしーむしーぬ

源氏早下り

つぎは

中宮(一)

九

中宮

思ひ

冷泉院よりありさせ給て乃とらにて中  
宮もくいまなふ

うれん乃ららと

中宮何事をも源氏とあはれとありし土家

乃中宮とあはれとあはれとあはれとあはれと

けふおちやきとあはれ

源氏語

うれいもくしとあはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

あはれとあはれと

あはれとあはれと

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

あはれとあはれと

中宮公

あはれとあはれと

あはれとあはれと

あはれとあはれと

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

あはれとあはれと

あはれとあはれと

あはれとあはれと

物の言かた形くても飛ハクも重ハクも  
うらとせ

りねあき

後世

身はくさじ

出家をすて

何しくはせらよかん

年乃つまふし

何と露乃

命の事

佛子近ぶ

所漢を仏よと仰とらんと授記に

何つらし事かた

何

出家をすて

何思ふ身

源氏も出家の公何とせ

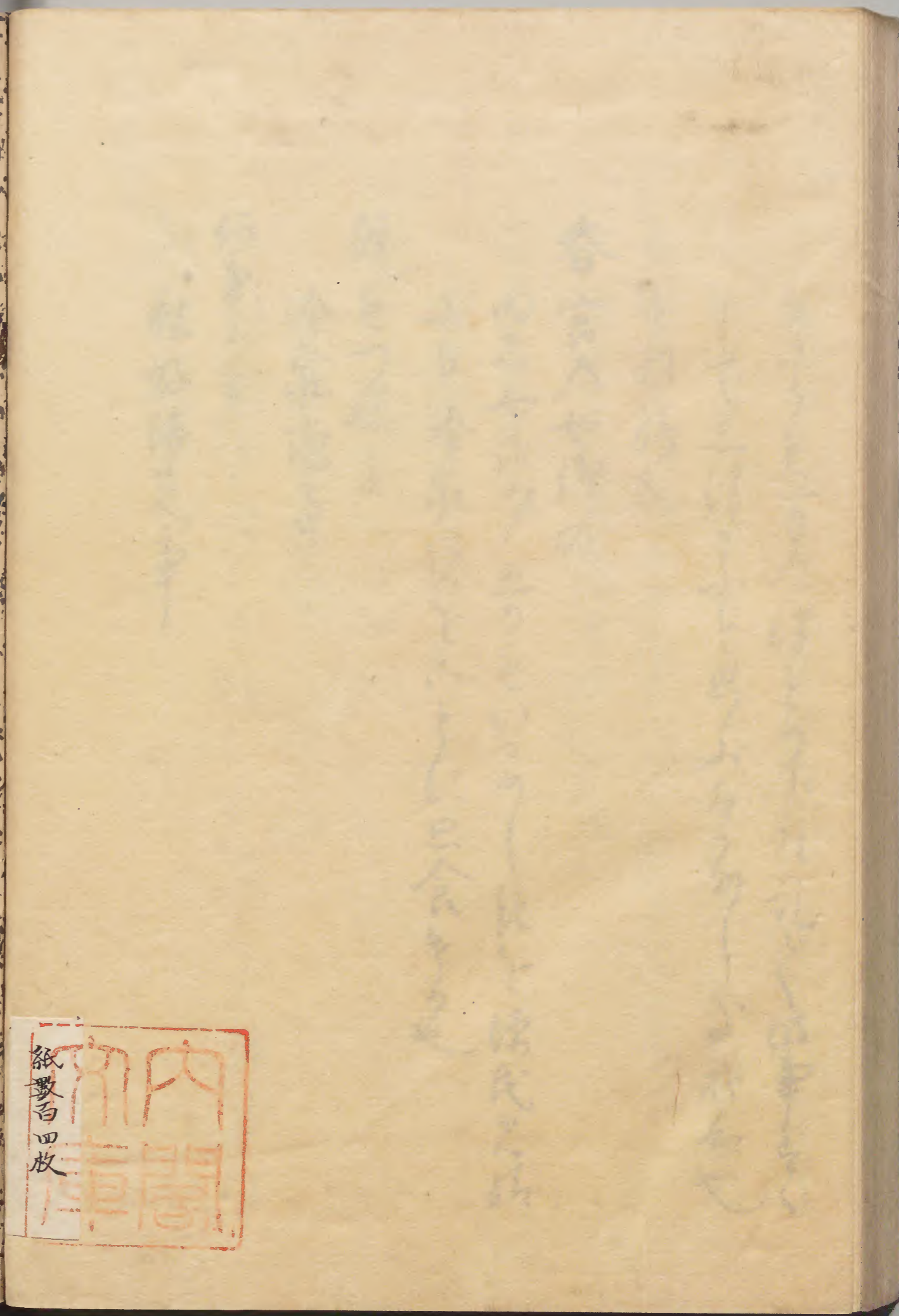
身はくればとあふうての留まの事

源氏初之う思え身はくればとあ

うつて今之何とせむとむんと思ひ







紙  
數  
百  
四  
枚

内  
閣  
文  
庫

